

## 教員養成機関における水辺の安全教育の提案

～ヒヤリハット事例の考察から～

上條 光亮

キーワード: 水辺の安全教育、ヒヤリハット経験、水難事故

## I. はじめに

学童期の子どもの最大の死因は不慮の事故であり、その中でも水難事故は、交通事故に次ぐ死因として報告されている。また、水難事故に関しては、その発生場所や状況が詳細に明らかにされているものの、水難事故の発生につながる危険な環境や行為(ヒヤリハット経験)については、その詳細が十分に明らかにされていない。

子どもたちの水辺での活動の安全を保障していくためには、教員養成段階で学生に対して十分な安全教育を提供することで、学校現場における水辺の安全教育の充実を図ることが効果的であると考えられる。しかしながら、これまでの研究では、教員養成機関の学生の水辺の安全教育に関する知識、経験、自信、意識等については十分に明らかにされていない。

## II. 研究の目的

本研究では、教員養成機関の学生の水辺の安全教育の知識と経験、自信、意識の実態、また、水辺の活動時に起きているヒヤリハット事例を明らかにした。また、調査の結果を踏まえて、今後の教員養成機関における水辺の安全教育の在り方について提言することを目的とした。

## III. 研究の方法

本研究は、2012年11月～12月に地方国立大学教育学部2年～4年生60名を対象に、自記式の質問紙を用いて回答を得た。質問紙は、1)知識(予防・事故時の対処、自然災害への対処等)、2)経験(水辺の安全教育を指導者として行った経験)、3)自信(安全教育を行う自信)、4)意識(水辺の安全教育を学校で行うべきか)、5)水辺の活動時のヒヤリハット経験(誰が、誰と、どこで、いつ、どのような)で構成した。

## IV. 結果と考察

男子30名と女子18名、不明12名から回答を得た。

### 1)水辺の安全に関する知識

正答率の平均は全10問中、80.0%であった。しかし、「津波発生時の対処」(75.0%)、「水難事故の発生場

所」(68.3%)、「事故時の着衣の扱い」(66.7%)、「水泳指導時の適切なプールの水深」(58.3%)に関しては、正解率が他の問いよりも低かった。防災や、水難事の予防と対応なども含めた包括的な水辺の安全教育を実施していく必要があることが示唆された。

### 2)水辺の安全教育に関する経験、自信、意識

水辺の安全教育について指導経験がある学生は2名のみであり、86.7%の学生が水辺の安全教育を行う自信が無いと答えた。一方、水辺の安全教育を行うべきと回答した学生は、98.3%であった。

### 3)水辺の活動時のヒヤリハット経験

ヒヤリハット経験として、31事例が挙がり、発生場所は、自然環境下(海、川、池)が19例、プールが12例であった。ヒヤリハットが起きた状況としては、大人が近くに居なかったとする事例が最も多く(27件)、子どもが単独で行動している時に、事故が起こるリスクが高いことが伺われた。そのため、水辺の事故を防ぐためには、家庭と連携しながら、子ども単独での行動を避ける指導を行うことが効果的であると考えられた。

### 4)ヒヤリハット経験の内容の分類

ヒヤリハットの内容は、溺れた(20件)、足を滑らせた(3件)、流された(2件)、落ちた(2件)、人との接触(2件)に分類された。「溺れた」事例の中で、足がつかなくて溺れた(7件)という状況が発生する背景には、子どもが水深の深い所で泳いだ経験がないことが影響している可能性がある。ヨーロッパやアメリカでは、水泳指導を水深の深いプールで行い、溺れた場合の対処についての指導を行っているという事例が報告されている。日本においても、教員養成の中での水泳教育や、学校現場での水泳指導の中で、溺れた場合の対応等を指導していく必要があると考えられた。

## V. まとめ

教員養成機関における水辺の安全教育では、水難事故の予防と対応、災害時の対応なども含めた教育を実施していく必要があることが示唆された。また、水難事故は、子どもの単独行動中に発生しやすいことを知り、家庭との連携によって事故の発生を予防していく必要があることが示唆された。